

中でも注目すべきは、スノーが麻酔の深度を五期に分類していることで、これが現在われわれが用いているゲデルの麻酔深度の先駆的業績である。このこと一つを取り上げても、いかにスノーが臨床的観察がすぐれていたかが理解される。

スノーがいつから麻酔科学に興味を持ち始めたかについては、これまで何も言及されていない。

従来の研究では、本書に見るセント・ジョージ病院におけるスノー麻酔リストによって、最初の例は一八四七年一月二十八日であったことが知られる。

しかしこれより丁度一ヶ月前、ロビンソンの診療室にスノーが赴いてエーテル麻酔を見学している事実を演者は発見した。

このことは、スノーがエーテル麻酔に当初から非常な興味を持っていたことを物語るものである。

このほか演者が新しく発見した史料についても言及する。

(弘前大学医学部麻酔科)

『図経本草』所引の「張仲景医書」について

真柳 誠

後漢末から魏・晋間頃の成立と考えられる「張仲景医書」に由来し、現代に単行本として伝存するのは、『傷寒論』『金匱要略』『金匱玉函経』の三書のみである。しかも北宋政府校正医書局がこの三書を校刊する以前の伝承経緯は極めて不明瞭なため、各書に成立当時の旧態がどの程度保持されているかは常に疑問視される場所である。だがこの問題については、目録学的研究に加えて、歴代の文献に記録されている佚文との校勘を行なえば、ある程度まで推察することが可能である。もちろんそのためには、成立と現伝の経緯が明らかで、宋以前に「張仲景医書」の佚文が引用された文献が必要である。

『図経本草』は北宋の嘉祐六年(一〇六一)に太常博士の蘇頌が完成、翌嘉祐七年に刊行された薬図と解説からなる

全二〇巻の勅撰本草書である。本書そのものは現伝していないが、そのほぼ全書は『証類本草』に転録されたので、現行の『政和証類』や『大観証類』からその内容が知られる。だが本書所引の「張仲景医書」とその佚文については、いまだ満足すべき検討がなされていない。そこで『図経本草』全文を調査した結果を報告し、これに予備的考察を加えてみたい。

まず「張仲景傷寒論」と書き出す文であるが、五箇所の記載がある。その内、320上bと393上bはこれを書名として挙げるのみで引文はない。148下bは処方名四首だけで、いずれも『傷寒論』（以下『傷寒』と略）『金匱要略』（以下『金匱』と略）に共載のもの。処方・主治文が完備するのは87下bと416下aで、前者は『金匱』に、後者は『傷寒』に対応文がある。同様に「張仲景傷寒方」が87上bに一箇所、これは『傷寒』所載の処方名二首を挙げるのみ。また「張仲景治傷寒」が一箇所、「張仲景治雜病」治傷寒」が一箇所、その内の201下aだけは処方名を挙げず、他は『傷寒』『金匱』共載方・『傷寒』方・『金匱』方・両書未収方の四タイプの処方が挙げられている。

次に「張仲景治雜病方」と書き出す文が三箇所、「張仲景治雜病」二箇所、「劉禹錫伝信方云張仲景治雜病方」が一箇所、全てに『金匱』方のみが記されている。なお、207下aには「仲景治雜病方」があるが、そこには処方・主治文等の引用はない。

また「張仲景治」と書き出す文が一箇所あり、その内一四箇所に『金匱』方、三箇所に『傷寒』『金匱』共載方が記され、258上b一箇所には『金匱』方の要旨のみが略述されている。さらに「張仲景方」が295上bに、「張仲景」が254上bの各一箇所に見えるが、いずれも『金匱』方の記載である。

この他、「統伝信方著張仲景」が160上bと372下aにあるが、いずれも『傷寒』『金匱』未収方である。

さて上述の表記中、恐らく書名と思われるのは「張仲景傷寒論」である。処方と主治文がそろった実質的な佚文はわずか二回の引用しかないが、その記述から現『傷寒』『金匱』二書にわたる内容を持つ書であった可能性が示唆される。『外台秘要方』に引かれる（張）仲景傷寒論も『傷寒』『金匱』両書の内容なので、これは特に不思議ではない。

い。ならば、同様に両書の内容が引文中に見える「張仲景治傷寒」なども、あるいは「張仲景傷寒論」と同類と考えられる。また表記形式に注目すると、これらは全て「張仲景」として書き出されている。『隋志』には「張仲景方十五卷」、『旧唐志』『唐志』には「王叔和張仲景藥方十五卷」が記録されているので、この系統の伝本から「張仲景」として援引されている可能性もある。ともあれ、蘇頌は少なくとも『張仲景傷寒論』と『(王叔和)張仲景(藥)方』のいずれかを参考に解説を著したことは、ほぼ疑いなくう。

ところでこれら所引文中には、理中湯とせず、治中湯とする。桂枝や白朮とせず、「桂」「朮」と記すなど、明らかに古態と見なすべき字句が比較的多い。またそれらは、『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』などに所引の「張仲景醫書」佚文から再引されているわけではない。つまり『図経本草』所引「張仲景醫書」の佚文は、今後『傷寒論』『金匱要略』の校訂資料として、より重視・研究されるべき価値を有していると考察される。

注(1)30上bとは、『政和証類』(人民衛生出版社本)の三二〇頁

・上段・左側に記載があることを指す。

(2)墨蓋子下ではあるが、20上bには『傷寒類要』に「張仲景傷寒論」の佚文が引用されている。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究室)